

障害児を育てるお母さんはどこで
ホッとするのか

研究員：

前廣美保／山田真由美／齋藤正／

小木曾正子／松田敏／岩田清美



子育て中の女性、特に障害のある子どもの母親の多くは、社会の規範の枠にとらわれて生きづらさを感じていることが、これまでの子育てひろばの試行でわかったので「ありのまま」の自分自身でいられる場づくりを始めた。土地を得て、事業を始めるにあたって相談した行政の窓口では「そんなニーズがあるのかがわからない」と言う。調査の計画を立てて再度話しに行っても、協力は得られない。

人の生活の困りごとは包括的である。だが、行政の窓口は分かれている。子どもに障害がある働く母親は、手帳の申請、サービス利用申請、医療費の助成、保育園、学校進学、全て違う窓口相談しなくてはならない。

筆者らは、それぞれがかかわりを持つ障害者支援団体に「障害を持つ子どもとその家族の居場所について」のアンケートを依頼した。大多数が「そんな場所が欲しい、どこにあるのか知りたい」と関心を持って協力してくれた。中には、まだ建物がない場所をわざわざ

ざ見に行ったお母さんもいた。一方で「この紙には『障害』と書いてあるので配布できません」と言う事業所もあった。障害を持つ子どもが利用する施設にも関わらず、保護者はその言葉を好まないという。さらに「障がい」と表記するのが正しいとのことであった。別の地域では、障害児の通う学校が広域で一つしかないの、子どもたちは寮生活で通学する。平日は介助の役目から解放される母親がゆっくりできるのかと思いきや、パート勤務を始めるのだという。「子どもを預けて母親がテニスやヨガの習い事に行くなんて、周囲の目があって絶対にできない」という話しであった。

アンケート集計をまだ終えていないが、ざっと見たところ、回答者の9割が主たる介護者の母親で、居場所として「自宅」が最も多く上がっている。家族以外に気を遣わずに過ごせることが大きな理由である。母親としての役割があり、常にやることがあるとはいえ、自分のペースで周囲に気兼ねなく過ごせるのが家である。

子育て中の女性、特に障害児を持つ母親は、いったいどこでひとりになってホッと息をつくことができるのだろうか。集計後に考察する。